「弱い支援者」論の構想

ー脱専門性のポストモダン・ソーシャルワークー

○　駒澤大学　荒井　浩道（5909）

弱い支援者，脱専門性，ポストモダン・ソーシャルワーク

１．研 究 目 的

本研究は，「専門性」に依拠して成立する括弧付きの「ソーシャルワーク」の限界克服の可能性を「弱い支援者」概念を手がかりに展望するものである．

「ソーシャルワーク」の誕生は，「近代」の成立と不可分の関係にある．19 世紀末から 20 世紀初頭，ブース（Booth, C.J.）やラウントリー（Rowntree, B.S.）により「問題」が社会的に発見され，リッチモント（Richmond, M.E.）により「支援」が科学化されるなかで「ソーシャルワーク」は産声をあげた（荒井 2023）．それから 1 世紀の歳月を経て，「ソーシャルワーク」は，「専門性」にもとづく支援的営みとして確立した．

今日，「専門性」概念を抜きに，「ソーシャルワーク」を論じることは困難である．「専門性」は，支援者にとって “無いよりは有ったほうが良い” ものとしてだけではなく，“低いよりは高いほうが良い” ものとして位置づけられる．このような，「ソーシャルワーク」が「専門性」にもとづく支援的営みであることを強調するポリティクスには，一定の意味がある．周知のとおり，「ソーシャルワーク」が有用であることを，クライエントや社会に対して説明することに，（必ずしも十分ではないにしても）成功している．

しかし，「ソーシャルワーク」における「専門性」を無批判的に肯定することはできない．とくに，ミクロな支援的営みに注目すると，「専門性」はその綻びを顕にする．「専門性」は，生身のクライエントを目の前にしたときに，意外にも無力である．それどころか，クライエントを傷つけ，関係を悪化させる危険性さえ孕む（荒井 2014）．

ここにおいて，「ソーシャルワーク」における「専門性」は，“誰のため，何のため” に必要なのかという疑問が生じる．教科書的には，“クライエントに適切な支援を提供するため” と説明される．しかし，それは単なるレトリックである（荒井 2015）．実際の支援場面における「専門性」は，支援者の “鎧” として機能する．すなわち，「専門性」は「弱い支援者」を防護するための “鎧” として必要とされたと考えられる．そもそも支援者は，必ずしも「強い」わけではない．むしろ「弱い」のである．

近年では，社会構成主義などのポストモダン思想にもとづき従来的な意味での「専門性」に懐疑的な眼差しが向けられるようになってきている．他方，ピアサポート研究の蓄積からは，「弱さ」の経験を差し出すことの支援的アドバンテージが指摘されるようになってきている．

そこで本研究は，脱専門性のポストモダン・ソーシャルワークとして，「弱い支援者」論を構想する．この作業をとおして，従来の支援論では十分に支援を届けることができなかった「困難事例」とよばれるクライエントへの支援の可能性を展望する．

２．研究の視点および方法

本研究の視点は,「ソーシャルワーク」を自明視せず一度括弧に入れることで根本的に問い直す点に求めることができる.「ソーシャルワーク」に抜き難く含まれる「近代」的な特徴を確認し,「専門性」概念がどのように位置づけられているのかを明らかにする．そのうえで,「専門性」に依拠した支援論が果たしてきた役割と限界を指摘する．そして，その限界克服の可能性を「弱い支援者」概念を手がかりに理論構成する.

本研究の方法は，文献にもとづく理論研究である．ポストモダン・ソーシャルワークの潮流として注目される，ナラティヴ・アプローチ，解決志向アプローチ，さらにはオープン・ダイアローグ，アンティシペーション・ダイアローグなどのダイアロジカルなアプローチの展開，ピアサポート研究の理論的蓄積を参照する．また，理論の説明を具体的に行うために仮想事例（支援者とクライエントの言語的相互作用）を使用する.

３．倫理的配慮

本研究は，一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづくものである.

具体的には，①社会的に不適切と考えられる用語や差別表現とされる用語を使用していない，②文献にもとづく理論研究であり，理論の説明に使用する事例は仮想事例である．人を対象とした調査等は行っていない．実際の事例も使用しない，③研資金提供者（日本学術振興会）の恣意的な意図に影響されておらず科学性・公平性にもとづいている，④開示すべき利益相反（COI）はない，の４点をあげることができる.

４．研 究 結 果

本研究の結果，ポストモダン・ソーシャルワークの潮流に「弱い支援者」概念を位置づけることができる.「弱い支援者」は，従来的な意味の「専門性」だけでは必ずしも十分には説明しきれない「もう一つの専門性」を考えるうえで示唆を与える.

「弱い支援者」論を構想する際に重要となるキーワードとして,「無知の姿勢」,「自己開示」,「身体性」,「セルフケア」があげられる.

５．考 察

「弱い支援者」論は,「困難事例」とよばれるクライエントに支援を届ける可能性がある．今後の課題として，近年のジェネラリスト・ソーシャルワークの文脈にどのように位置づけられるのかを検討する必要がある.

（文献）
荒井浩道（2014)『ナラティヴ・ソーシャルワーク―“〈支援〉しない支援”の方法』新泉社.
荒井浩道（2015)「ソーシャルワーカーに『専門性』は必要か？―ビギナーズラックとピアサポートを手がかりに」木下大生・後藤広史・本多勇・木村淳也・長沼葉月・荒井浩道『ソーシャルワーカーのジリツ―自立・自律・而立したワーカーを目指すソーシャルワーク実践』生活書院，129-156.
荒井浩道（2023)「ソーシャルワークの沿革―ポストモダンソーシャルワークの潮流」木村容子・小原眞知子編著『ソーシャルワーク論―基盤と専門職』法律文化社，101-113.
（謝辞）
本研究は， JSPS 科研費 21K01956「誰も排除しないナラティヴ・アプローチ教育プログラムの開発と評価」（研究種目：基盤研究 C，審査区分：社会福祉学関連，研究機関：駒澤大学，研究代表者：荒井浩道，研究期間：2021 年度～2024 年度）の助成を受けた成果の一部である.